

情報春秋

THE JŌHŌ-SHUNJU

第70号 1981年12月16日(第345号)

6月20日(土曜日)

毎月3日10分(1981年)
定価 (1冊) 4,000円
代金引当金(1冊) 4,000円
郵送料 102
情報春秋社
電話 (03) 05045

掲載する誌面・後立つ情報

II 刊 **ゲンダイ**

同角氏三人

「同角氏三人」は、同角氏の三兄弟の伝記である。同角氏は、戦前戦後の文壇で活躍した作家で、その三兄弟の経歴と創作活動が詳しく記されている。

文庫出版のつとめ

文庫出版のつとめ

「文庫出版のつとめ」とは、文庫出版の意義と役割を論じた文章である。文庫出版は、知識の普及と文化の継承に重要な役割を果たしている。この文章では、文庫出版の歴史と現状、そして今後の展望について詳しく述べられている。

文庫トラブルの考え方

問題が起つてどうするか
り起さない為にどうするか

中央公論社 鈴木敏彦
(REPRINTED)

「文庫トラブルの考え方」とは、文庫出版におけるトラブルの発生原因と対処法を論じた文章である。文庫出版は、多くの書籍を出版しているため、トラブルが発生する可能性は高い。この文章では、トラブルの種類と原因、そしてそれを防ぐための対策について詳しく述べられている。

「文庫トラブルの考え方」の続き。ここでは、文庫出版におけるトラブルの具体的な事例と対処法について詳しく述べられている。また、文庫出版の意義と役割についても再確認されている。

「文庫トラブルの考え方」の続き。ここでは、文庫出版におけるトラブルの具体的な事例と対処法について詳しく述べられている。また、文庫出版の意義と役割についても再確認されている。

「文庫トラブルの考え方」の続き。ここでは、文庫出版におけるトラブルの具体的な事例と対処法について詳しく述べられている。また、文庫出版の意義と役割についても再確認されている。

「文庫トラブルの考え方」の続き。ここでは、文庫出版におけるトラブルの具体的な事例と対処法について詳しく述べられている。また、文庫出版の意義と役割についても再確認されている。

ておいた方がいいし、取引の一端には悪いありませんから、契約四があるが本筋なんじゃないね。ただ、習慣でこれまでは契約書なしで来たため、今急に契約書を書かすことにほならないでしょうね。まだ契約書がないからといって何をしてもかまわないというところでもないでしょうから。

「今まで契約書なしでもこれまで問題なくやってきたし、これからは問題ないやうにしておく白紙はありまから、契約書は交わして交わさなくても、問題は同じことではないでしょうか。あとは、形式みたいなのをしよう。」

「たしか、先回話したように著作権者では、原稿の複製でない場合は認めていくことがあるので、ハッキリさせておく必要がある。先儀がわからなくなることもあるわけだ。」

「出版前の準備期間は、特別な取り決めのない限り三年となっていますが、最近三年以内でも文印によるケースがあるようですよ。が、このことについてはまだおぼえですか。」

「三年間というのは、これまで自然に川流と定例みたいなのもですが、大体それと勘と勘というが本筋でないのではありませんか。あと、会社で三年間は特別に（？）しないという社内内規があるなら、それはそれでいいし、どこまでかは三年というところもあるでしょうし、ハックス版に重宝すれば半年後に出版して期に間に合はすでしょう。その後は社内で、どうしてもやらざるを得ないのとはちがいますね。」

「中公文庫の社内では、自社のものを流通する期間の内規はあるのか。」

「一応、三年です。ただ、出版には関係なく文庫にする場合もあるし、三年はたて必ず文庫にするというわけでもありません。一応、一冊の本が三年というところと、二年で映画化の時点で持ち上げ、そこで文庫にするというところはあります。」

「三年たつても、ハードカバーが売れていなければ、紙装か、布装か、あるいは別の本に引きかえらるという一つの考え方がないですか。」

「そういうやり取りはありますね。たしか、文庫本に（？）売ります。」

「おとまつていた本が売れたいというケースもある。その初めの期間はいろいろ様子を見ようね。ていねいにね。ばならないでしょう。ちょっと間用には決まらねえね。里本が、ソリと止まるのもあれば、ものによって出版期間がたつたのが（？）版が出たことでハズレがつく（？）でもありまから。」

「一冊を待つていない版元さんのもつては、三年（？）あるいは更長の期間を希望するということですか。」

「ええ、かつうちでも金庫を持っていたという（？）経験がありますからね。ですから、ヨソから向でも待つてくるという形をあまり好まないということですね。」

「それが、中公文庫の権利を規定しているからですね。」

「つまり、ヨソさんで原稿心して流し作家的本を売っているのに、それをもうとってこなくても名前は残る（？）はあ、というところと、それは何十方部も出ないかも知れませんが、名義を欲しい人のため（？）すというのが文庫の使命であり生命でもあるでしょう。一方では大いにかせがなければならぬのも本筋ですか。」

「一般に、出版前についてどのようにお考えですか。」

「出版前については、もう少しキチンと確立したいという気持ちはあります。特に文庫をやっているところ、そういう問題によくぶつかりますからね。現状ではヨソさんのものをどう（？）し、世に持つていかれやう（？）とかがありますから。ただ、これもいろいろなケースがあって、断つてお断つてきて、ホイと本にして出版売れたというものがあれば、出版社・編集者がいろいろ苦心をして作り上げた本もあるという具合で、一冊には決まらぬ気がしますが、ね。ただ、それを二冊はねければならないわけですね。こういう問題では、著者が権利を持つていい場合の本と出版社がもつて権利を持つていい場合の本と、これ

「三冊たつても、ハードカバーは悪く別の本だと扱います。すけが売れていなければ、紙装か、布装か、あるいは別の本に引きかえらるという一つの考え方がないですか。」

「そういうやり取りはありますね。たしか、文庫本に（？）売ります。」